

わたしの聖戦

◎◎女性が働くということ◎◎ 19

医学ジャーナリスト 植田美津江

今度生まれ変わったら……？

歴史に「もし」は禁句だが、将来に対する「もし」、つまり今度生まれ変わったら何になろうかという発想はなかなか楽しいものである。

同様に、生まれ変わったら男がいいか女がいいかといった問いを考えるのも、話題づくりのきっかけとして、あるいは暇つぶしとしても結構イケル。

統計数理研究所による調査によれば69%の女性が「次も女がいい」と答えたそう。46年前に同じ質問を投げかけたときには、64%の女性が「今度は男に生まれたい」と希望したというから、数字が完全に逆転した格好

になる。

長い間、女性は社会的存在ではなかった。由緒ある系譜図を見ても、女性には名が記されていないし、女性は不浄だと決めつけられ女人禁制の場があちこちに見受けられた。

不浄というのは、女性が「穢（けが）れている」という意味。

よく知られているように、毎月来る生理や出産の役割を担うことから、汚らわしい「血」のイメージを喚起させ、それゆえ女性のからだそのものを忌み嫌う傾向があった。特に清浄を尊ぶ神事の際には、女性の存在自体がご法度であり、日常の神

社仏閣への参拝さえできなかったのだ。これが、男尊女卑の思想のベースになっており、女性は虐げられていたといった印象を一層強いものにしてきた。

日本の家制度のなかでは、女性は家に閉じこも

昭和21年10月7日
改正公布
昭和21年11月30日
昭和21年5月3日



るのも当然だとみなされた。今では不妊の原因は男女双方に認められるほか、いわゆる「相性」の善し悪しや置かれていた環境にも大きく依存することがわかってきた。実際、相手が変わったら妊娠できた、あるいは必死

になつていた不妊治療をやめた途端、あっさり妊娠した、というケースをちらほら耳にすることも多い。

明治18年にできた選挙法では、男子だけに選挙権があった。女性にも選挙権が与えられたのは最初の法制定から60年を経た昭和20年のこと、女性が政治に参加できる大きな一歩を踏み出したのもそれほど大昔のことではないのである。非人間的な扱いを長い間受けてきた女性にしてみれば、今度は男性としてこの世に生まれ、もつと自由にもつと好きに

うに生きてみたいと考えるのは当然であつたらう。しかし時代は変わった。これまでの鬱（うつ）積を晴らすかのごとく女性たちはおおっぴらにこの世を謳歌し、実に楽しく生きる事ができるようになった。「今度も女に」という答えが大勢を占めるのも納得がいく。いつ

とき、相撲の土俵に女性を上げろという主張があつたが、当の女性たちを含め大半は現状維持を支持していた。社会全体があまりに女性に都合よく変わっていくので、逆に「伝統」という名目で女人禁制の場を許したということだろうか。

男性の最後の砦（とりで）が守られたのも、皆が自由で気ままに生きていくからこそその社会の「余裕」といえる。余りなくもない。（株）日本メディアカル総研 代表取締役

イラスト・三浦義雄